



祭礼空間の変容に見る江戸・東京の都市形成史研究

ー神田明神と人形町ー

K00093 深澤 直人

1 はじめに

1-1 研究目的

都市空間の変貌が激しい江戸・東京において、その都市構造を知る手段の一つとして「祭礼」がある。よって江戸・東京で長年行われてきた祭礼空間の変容を見ることで、その都市空間の構造を分析できると考える。

そこで本研究では、江戸・東京で長い歴史を持つ神田明神（神田神社）の神田祭とその氏子地域の1つである日本橋人形町の祭礼空間の変容と都市空間の変容との繋がりを分析し、変貌を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究方法

- ① 江戸・東京の祭礼・都市空間の変容を見る上で、江戸時代（寛永・承応・寛文・延宝・文久）→明治時代（明治28年）→昭和時代（昭和5年）→現在と時代区分し、古地図を用い、各時代ごとの都市空間の変容を調べる。
- ② 神田明神所蔵の史資料により、神田祭における能舞台の復元や、時代ごとの神輿・行列の巡行路を調べ、祭礼空間の変容を明らかにする。
- ③ 祭礼空間の変容と都市空間の変容とを比較し、江戸時代から現在に至るまでの都市形成過程を明らかにする。

2 神田明神と神田祭

2-1 神田明神と神田祭の歴史

神田明神（神田神社）は社伝によると、天平2（730）年創建とあり、すでに1273年の歴史を経た都内で最も古い神社の1つとして知られている。はじめ神社は皇居のほとり現在の大手町（当時：芝崎村）にあったが、江戸に幕府を開いた徳川家康が神田明神を深く尊崇して、幕府の発展と城下の大規模な造成により、元和2（1616）年には現在の境内地（千代田区外神田）に移転した。

そして神田祭は天下一の祭礼としての意味をこめ、江戸時代から天下祭とも呼びならわされ江戸市中を挙げて

執り行われていた。今では神田祭は108町の氏子町会を抱え、2年に1度、盛大に行われる東京の大きな祭礼である。

2-2 神田明神と能舞台

神田明神の祭礼は神事能から始まったといわれている。能には社殿、神門などの建立、修繕や祭礼の為の資金集めの勸進能があり、神事能は勸進能の一種である。この神事能は大永年間（1521～1527）頃よりずっと続いており、現在の境内地に神社が移転するまでは神社境内で行われていた。しかし元和2（1616）年に現在の境内地に神社が移転すると、境内では大きさが足らず、現在の昌平橋の付近（当時：加賀原 図1）の明地で3年に1度9月16日に能舞台が行われていた。この能舞台は組立て式であり、開催時には加賀原に壮大な能舞台が組立てられていた。しかし享保6（1722）年、能舞台や能道具を収めた倉庫が火事で焼けてしまい、神田明神が行う神事能はなくなってしまう。

その後は能役者が自ら幕府から興行権を得て、加賀原で能舞台を開いていた。そんな中、弘化5（1848）年に寶生太夫が行った能舞台は大きな賞賛を受け、その様子を描いた「寶生太夫一代勸進能絵巻」が神田明神に収められている。

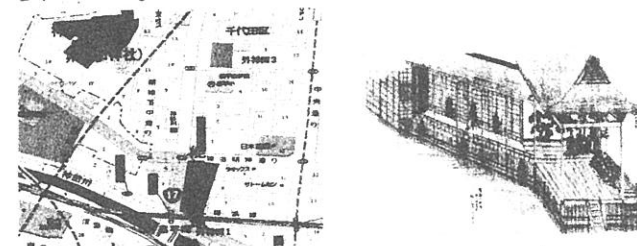


図1 神田明神と能舞台の位置・能舞台の様子

3 江戸時代の祭礼空間

3-1 明地空間

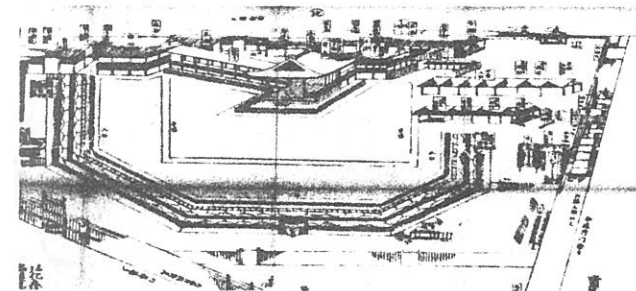
能舞台の架設地である加賀原の明地は、神田川の川沿いで昌平橋の橋詰に位置し、資料によると総坪数約4100坪もあったとある。町の大半に川やお堀が存在し、舟運

を始めとする水路ネットワークが作られていたこの時代、橋詰のこの広大な明地は、全国からの物流の集積地として都市空間に存在していた。そんな今の都市の中では存在し得ない様な広大な空間を、祭礼時には祭礼空間として利用していたのである。

3-2 能舞台の復元

では江戸の都市空間におけるこの広大な明地の中で、祭礼時の仮設能舞台が一体どのように存在していたのだろうか。そこで、神田明神所蔵の「寶生太夫一代勸進能絵巻」から江戸時代の能舞台の様子を3次元CADで復元し、その様子を明らかにした。

はじめに「寶生太夫一代勸進能絵巻」から能舞台を始めとする建物の配置関係を捉えた。そこから全体の平面図を画いた。そして戦国時代から同じ仮設能舞台として建てられており、今もそれが残る広島県沼名前（ぬなくま）神社の能舞台から高さを参考にし、全体を3次元に建ち上げた。



1M 10M 20M
5M

図3 加賀原能舞台 平面図

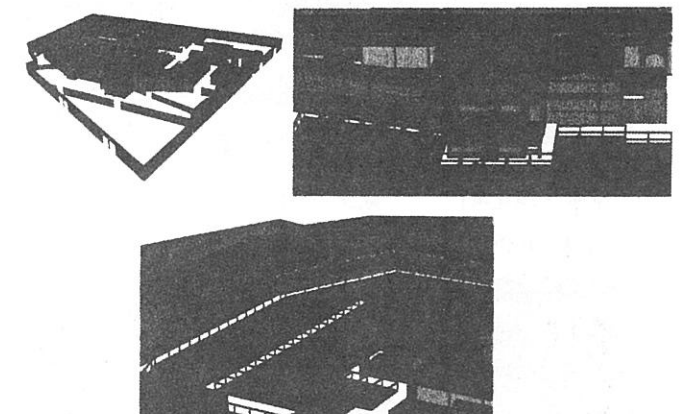


図4 加賀原能舞台 復元パース

4 人形町の都市空間の変容

日本橋人形町地区は時代の流れと共に大きな変化を遂げてきている。ここでは寛永・承応期（1624～1654）、寛文10（1671）年、延宝期（1673～1680）、文久元（1861）年、明治28（1895）年、昭和5（1930）年の6枚の古絵図・古地図を用い、現在の地図に比定することで、都市骨格構造の変容を明らかにした。その結果は次の通りである。

寛永・承応期にはこの町は「吉原」が存在し、それを中心に広大な武家屋敷と町人地で構成されていた。道の数は少なく、町の中には川やお堀が存在し現在の姿とは大きく違っていた。寛文10年には明暦の大火で「吉原」がなくなりその跡地に町人地ができるが、依然大きな武家

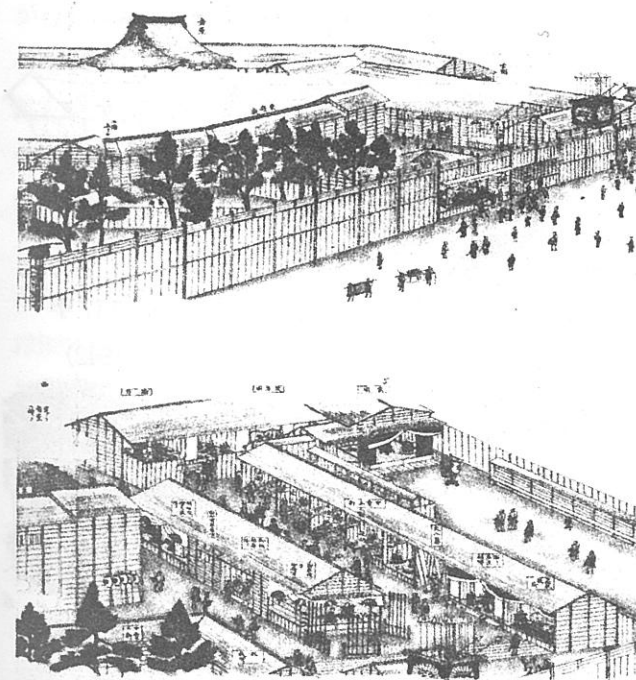


図2 「寶生太夫一代勸進能絵巻」

屋敷が町の大半に立並び、それを中心に町の中には堀や道が構成されていた。その後、延宝期から文久期においては以前の広大な屋敷地が、複数の地主によって分割所有され、やはり町の大半が屋敷町として成立している。しかし江戸時代が終わり明治時代に入ると、一転して町の中から武家屋敷が消え、複数の堀が街路になり、街区は沢山の町名で構成される町に変貌する。こうして以前は屋敷町であったこの町も、現在のような町人地になっている。その後、関東大震災が東京を襲い、昭和5年の町の様子は明治期に比べ若干の変化が見られる。そして同年行われた「帝都復興事業」によって、町は大変貌を遂げ、街区は区画整理され、現在の日本橋人形町の姿へとなったのである。

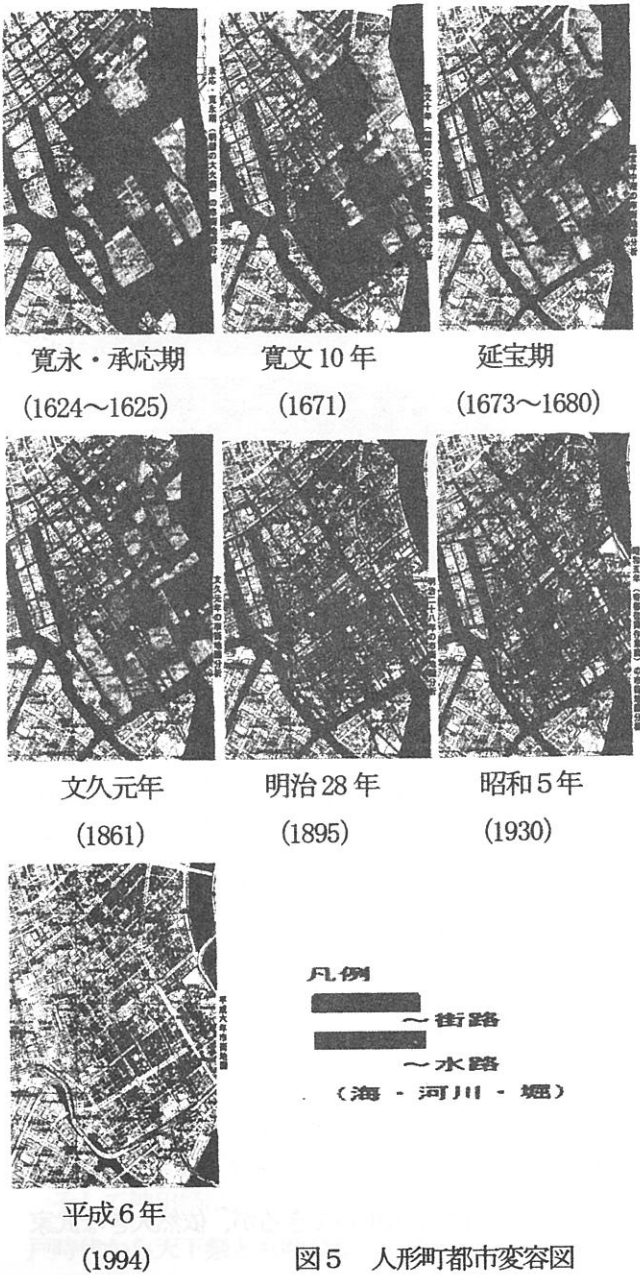


図5 人形町都市変容図

5 人形町の巡行路の変容

ここでは神田明神の協力を得て、現存する神田祭の神幸祭の神輿・行列の巡行路を時代別に比較してみた。

現在、神田明神に残る一番古い巡行路表は江戸時代の天保14(1843)年のものであるが、この時代は巡行路に人形町は含まれていない。人形町地区に巡行路が含まれるのは明治期に入ってからであり、明治3(1870)年には当時の武家地を除いて町人地区を巡行している。その後、明治20(1887)年には武家地が消え町人地となった人形町を巡行路が回る。そして関東大震災直前の大正11(1922)年の巡行路を見ると、神幸祭が4日間開催されたこともあり、人形町をくまなく巡行している。震災後には、昭和5(1930)年の帝都復興事業によって町が大変貌を遂げると、その年の順行路は新しい街区をくまなく巡行する。しかしその後、戦時体制に入った影響により昭和初期の巡行路は簡易化してしまう。さらに戦後から現在に至っても、交通規制の問題などにより、シンプルな巡行路になっている。

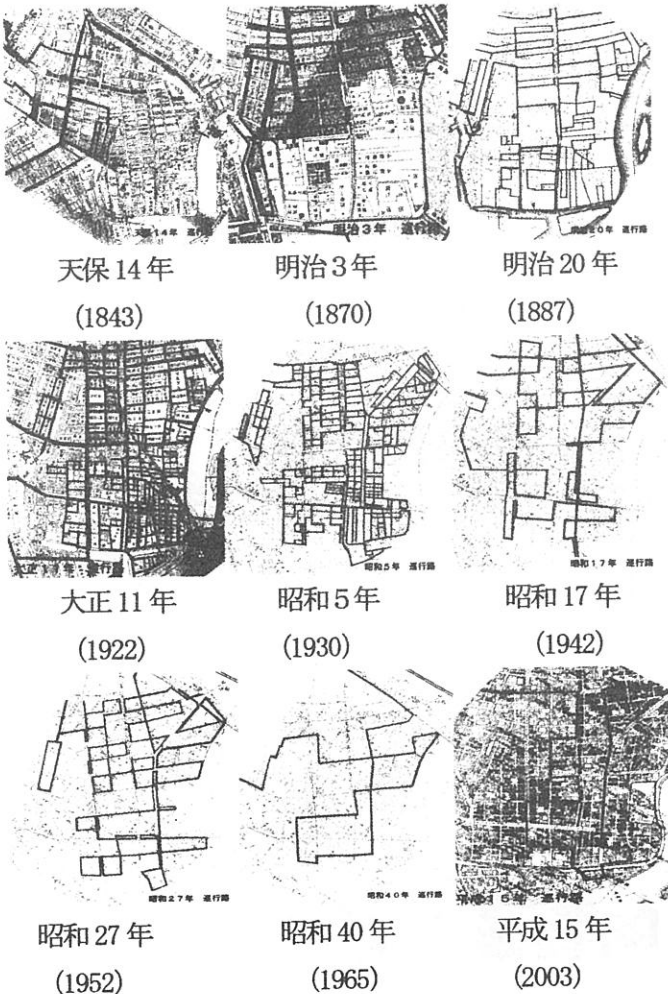


図6 人形町巡行路変容図

6 祭礼の変容

6-1 山車の行列とその廃止

神田明神の祭礼は神事能から始まったが、嘉永期には加賀原の空地が無くなり、能舞台の続行が不可能になる。すると神田祭は宮神輿と巨大な山車の行列を作り、氏子地域を巡回した。江戸時代から明治期に至るまでこの巨大な山車は祭の象徴として存在する。しかし明治期になると、徐々に東京の町の中に路面電車が走り始める。その為の電柱・電線が町中に存在し始め、巨大な山車は祭礼時に交通障害を起こすことになってしまった。また、巨大な山車が倒れるなどの事故も起き、明治30年代にはついに巨大な山車は消失し、祭礼時に飾るだけのものになってしまった。そして現在に至るまで、神田祭では山車よりも神輿中心の祭礼になっている。

6-2 町会と町神輿の巡行

現在、神田祭の神輿には神幸祭の際に神社から出る宮神輿と、氏子地域の町内で出る町神輿がある。宮神輿は氏子地域全体を回るのがに対し、町神輿では各町内を町内会の指示の下、隅々まで回る。日本橋人形町近辺にも現在45の町内会が存在し祭礼時には町神輿が町内を回っている。

しかしこの町神輿が神幸祭に合わせて出てきたのは戦後の昭和27年頃であり、それ以前は神幸祭に町神輿は存在しない。では何故この時期から神幸祭に合わせ町神輿が普及し始めたのか。

それは先ほど解明した様に人形町地区の宮神輿の巡行路というのは、戦前から戦後そして現在に至るまで簡易化されてきている。そしてその簡易化の始まりは戦時体制下の昭和17年と戦後再開された昭和27年の祭礼時からである。つまり祭礼時に以前の様に宮神輿とその行列が町内を隅々まで回らなくなった影響を受け、宮神輿とは別に町内で神輿を作り、それを住民全体で町の隅々まで担ぐ様になったのである。

さらにそこには町内会の存在というものが大きく関係してくる。表1が示すように、戦後1度は敗戦の影響で区内の町内会は解散を余儀なくされる。しかしその後、町の復興を目標に町内会が次々発足され、60近い町内会が結成される。すると町内会を中心に根強い町のコミュニティが生まれ始める。そしてそれが町神輿の誕生にも繋がったと考えられる。

現在では、町内会数や町や人とのコミュニティも少しずつ失われてきているかもしれない。しかし戦後から続くこの町神輿の存在によって、祭礼時には町内会や住民とのコミュニティが築かれている。

年代	町内会数
昭和22年	0 (敗戦による町会の解散)
昭和23年	1 (戦後初の町会発足)
昭和28年	57
昭和34年	51
昭和44年	48
昭和54年	46
平成元年	45
平成15年	45

表1 日本橋人形町地区 時代別町内会数

7 結論

日本橋人形町の都市空間や神田明神の祭礼空間は、時代の流れと共にその形が変わっていった。

- ①近世には道路よりも水路が発達し、橋詰などに明地が存在しており、その明地で神事能の舞台を開き、祭礼を行った。
- ②明治になると水路や空地が消え、都市の中を道路が覆い尽くす。その為、道路を使った神輿や山車が中心の祭礼を行う。
- ③しかし明治30年代に入ると路面電車や電信柱が増え、その影響で山車は廃止される。その為、神輿中心の祭礼に変化した。
- ④大正末から昭和初期、震災復興による大通りや路地を含んだ複雑な都市空間が形成されると、宮神輿や町神輿によって、都市の中を巡行する現在に近い祭礼の形が成立した。

以上の様に祭礼空間は、都市空間の変貌に合わせてながらその在り方を変えており、互いに密着な関係にあった。

これからも東京という都市は大きな変貌を遂げていくであろう。しかしそれに伴って祭礼空間というものも形を変えながらも残っていくだろう。

<参考文献>

「中央区沿革図集～日本橋編～」	中央区立京橋図書館	1995年
「5千分の1 東京-江戸市街地図集成 第1・2期」	地図資料編纂会	1989・90年
「神田明神史考」	神田明神史考刊行会	1992年
「神田の祭：その周辺」	東京都千代田区	1970年
西和夫 「祝祭の仮設舞台」	彰国社	1998年